

とぼと行きかけたが、急に振返つて、「お父さん、きつとぢきに迎へに来ておくれよ、聲は腸を絞るやうであつた、途端、不意に響の小屋から人影が動いて、「また、往かないんだね、何を愚圖々々して居るんだよ、噛みつくやうな一喝をあびせたのは、かの端艇で来た女であつた、ハッとする拍子に娘は石に躓いて、よろ／＼と仆れやうとしたが、危く踏こたへて、其儘堤を下つて行つた、枯葦枯芒の間から、少時紅い帯がちら／＼、隠れ見え、見えかくれして居たが、懸てそれも、たそがれの色にまぎれて了ふと、老爺は伸び上つて「お谷よう、お谷よう」と呼んだ、するといと幽かに「アイヨ」と應へる聲がした、みたび老爺が「お谷よう」と呼んだ時は、はやよほど遠さかつたと見えて、風に靡く枯すゝの音のみざわざわとひひひて、暖がれた聲音が、空しく四圍の寂寞を破るのみであつた、「あゝ、到頭往つて了つた」と親爺は力なげにがつくりと首うなだれて、さびしげに小屋の方に、踵を向けるのであつた。

儂もそこ／＼ブックを收めて、夕暮の色につゝまるゝ此沼べりを後ちにしたのであるが、いはうやうなき



春の海山城ゆか子

種寂寥の感に打たれて、はからず眼前に生別を見た親子の上に、ひとごとならず祝福が祈らるゝのであつた。  
 (評) 養父のなきげ、生母の無情、相對して正に好箇の悲劇。

五等 ○戦ひのあと

岩代須賀川町 服部水仙子

「オ、寒むい」と誰やら。牙を渡つた月の夜の敷石に、駒下駄の音カラコロ。「さよなら!」左様なら「や失敬」失敬門の前から二手に別れて、小石を叩く洋杖の音、規則正しい靴の鳴り。それもだん／＼と遠くなつて、一しりの笑ひ聲が響いたあとは、もう全く聞えなくなつた。送り出た玄關に月の影寒う、どこかの犬が頻りに吠えてゐる。何となく氣が抜けたやうな體の、足は向くともなしに今の十疊へ。取り残された火鉢が五つ、いづれも皆巻煙草のからがまるて林のやう。其一つを抱へて、頭痛するとして一座にそむいた文雄さまが、頻りに灰に書いて居た字は何であつたか。火は皆形のまゝ白くなつてゐる。

重なつて、頰れて、横に縦に、亂れた歌留多に、盆を飛んだ南京豆のからがところへ。堆き密柑の皮を越えて向ふに一つ横はつてゐるのを手に取つて見ればこれやこの彈丸。花々しかつた戦ひの面影は、私ですよいや僕のだの争に、身を犠牲の裂札二枚。

「はよー！」味方の連戦連敗に日頃の負け嫌ひを、眞白な頬に赤く現はしてこゝを必死と奮戦の、富子さまがあの凜としたお聲。まだ此耳に残つてゐる。さては破れ鐘のやうな聲はりあげて、讀みあげては、一度にとつと笑はれて、すました顔の北村さま。まだ目に見えるやう。

茶の間の時計はチーンと一時を打つた。

淋しいあたりを見廻して、迫つてくるを覺えた寒さに、手近の火鉢をひき寄せようとした手先にカチリとふれた近眼鏡、一見して私は北村さまのといふことを知つた。鐵縁であるから。一寸かけて見ると、あたりのものが小さいやうな、大きいやうな、少しも判然としな、こんなものをかけて見えるのか知らと立あがつて見たが、疊の面がでこぼこして、なんでも無いところをまたいだりする。そうだ此眼鏡をたゞは返されぬ、何ぞ趣向もがなと、一人で笑壺にいつてゐると。こちらに向いて来る足音が……と思ふ間もなく襖をガラリと兄様がお顔。「やあ……はよー、何だ其顔のさまは

……さう、私はまだお白粉の傷を洗はなかつたのでした。

(評) 作者はこれ一方の旗頭。

(又曰) 灰に文字書ける人の、形の儘白うなれる火鉢の火の如く、消え失せたるは如何。

秀

逸

○宿がへり 筑後 しのぶ子

奥様のお羽織縫ひ上げて、ちよつと、手を火鉢にかざして居ると、私の名をお呼びになるお聲、私は急いで、お部屋に出ると、いつものやうなお優しいお目に、デット、私をごらん遊ばし「うれしいだらう」とのお言葉私はまだご奉公申してから間もないので、何と申し上げていいやら！モヂ／＼して居ると「オホ、わかからないの、あすはうちにいつてたんと母あさんのお乳おあがり！」とのこと、私は始めて宿がへりのお許がてることゝわかりました。

私は嬉しくつて／＼、もう心はあの戀しい田舎の家にいつてをります。あけの朝はいつもより早う目がさめお部屋／＼のお掃除しまつて、お暇乞申してお屋敷を出たのは彼是十時？

本通りに出るまでは、まるで夢中、いつもゆかしいお琴の音、なづかしいお調、と足緩う通る花野様のご門